



除草剤開発の思い出(1)

(財)日本植物調節剤研究協会 顧問 吉澤 長人

序に代えて・除草剤と私の出会い

私が除草剤に関係したのは、たしか昭和25年頃だと思います。

当時水田除草剤として、2,4-Dが開発され、各種の試験を経て、普及に移された年であります。そこで2,4-Dの普及奨励を担当することになりました。石原産業、日産化学の両社で、「2,4-D普及会」を結成して、これを普及・推進の中心としてスタートしました。同時に研究と普及はあたかも車の両輪の如く積極的に推進すべきものであるという見地から、随時研究会を開催しましたが、私は当初から、これらに関与し、日本における除草剤をアレンジすることとなり、いつの間にか40年の歳月が流れました。

この頃から、2,4-D普及会のバックボーンとして活躍されたメンバーは、東大から藪田、住木、野口の各教授、川田、川延の各助教授、宗像助手のほか多数、宇大から竹松、岡山大から笠原、千葉大から沼田の各教授、それに国立試験場から農事の荒井、蚕糸試から潮田氏ほか、農林省からは農業改良局研究部の安孫子、杉、吉澤、普及部からは中尾、鈴木氏らが参画して基礎研究と応用について、討議を重ねたのであります。

すなわち、民間の石原・日産の普及会だけでなく、国側の研究機関と一身同体になっ

て行なわれ、これに関与する人々はあたかも同一機関に属するが如く、ディスカッションを行って来たのであります。

昭和20年代に、この官民共同態勢で研究が行われたことは、従来には見られなかった快挙といえましょう。

さて、この2,4-D普及会の会議では、私は聴き役に廻ることが多かったのですが、この時の各位の論議ご意見が、私を今日あらしめた主因であると信じております。この機会に改めて、普及会及び研究会に参加された方々に改めて深甚なる謝意を表するしだいであります。

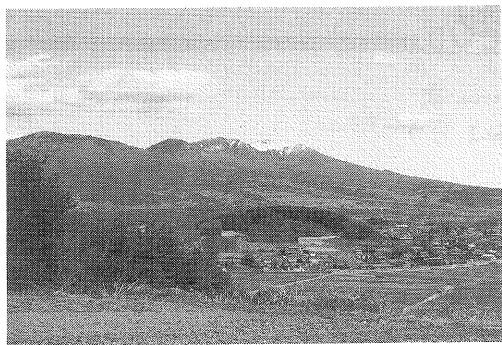
信州の山村に生れ農に励む

私は信州の蓼科山と浅間山を指呼の間に望む風光明眉な山村に1922年に生れました。

子供の頃は体が弱く、この様なひ弱な体質では満足に育つかどうか、両親の心配のたねだっ



〈手取り除草は、四ツん這い作業〉



〈早春の浅間山遠望〉

たそうです。そこで体をきたえることが何より大切だという父親の切なる願いから、農学校に入学致しました。

私は自らすすんで農業を手伝い、きびしい農作業にはげんだのであります。

田の草取りだけは何度繰り返しても、苦痛であったことを今でも忘れることができません。真夏の炎天下、四ツん這いになって泥田をかき廻す作業は、一番取りから四番取りまでありました。ことに、四番取り作業になりますと稲の生長がすすみ、とがった稲の葉先が目をさすことが多く、汗といたみが目にしみこんで大変な重労働でした。

この草取り作業がなければ、農家の稲作は、どれほど楽になることか、私の胸深く秘めた切ない想いでした。

毎年田の草取り作業が終わりますと「農休み」といって、田の仕事を休み、栄養のある食事をとって、体力の回復をはかる慣習がありました。

農林省農業改良局へ

その後予期せざる事情から、農林省農産課に勤務することになりました。

その後、農業改良局研究部に移り、麦及び雑穀の研究補佐官になり、後に稲作担当に替りましたが、そのかわり、試験研究機関の総括運

営も担当することになりました。

それ以後、青・少年時代に体験した、あのいやな田草取りの作業を省力化するという、除草剤の研究に没頭することになりました。

何はともあれ、与えられた課題をいっしょうけんめいやることが私の使命であると肝に銘じたのであります。

昭和40年1月15日農林省を退職いたしまして、除草剤、生育調節剤の委託試験を専門とする日本植物調節剤研究協会に入ったのであります。

以来、除草剤、生育調節剤の試験研究方法の改善、新しい薬剤の開発、農家のため、メーカーのため、連絡・協調につとめて来ましたが、少しは世に認められるようになりました。

この26年間に及ぶ体験を書いてみないかと多くの関係者にすすめられました。

つたない体験が、いささかでも関係各位のためになればと存じ書きはじめました。

各位のご批判とご教示をお願いしながら、すすめてまいりたいと思います。〔次号に続く〕

